

---

# 空説

今夜が山田

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

空説

### 【コード】

N5938M

### 【作者名】

今夜が山田

### 【あらすじ】

只々、彼の人生(?)を屈折させた物語。

## 日進月歩（前書き）

最強とか転生とか憑依とかハーレムを本気出して考えてみたら・・・  
全くの別物が出来上がった。

正直、反省している。

## 日進月歩

夢は夢で終わる。

如何に手を伸ばそうとも、如何にその先に焦がれようとも、夢は夢と終わる物だ。

だが、夢を夢と終わらせぬ者も存在する。

しかし、そこに到るまでに誰もが犠牲を払い、誰もが血と汗を流す。

故に、夢は新たな夢を生み出す。

結局、全ては夢から始まり夢に終わる。

だからこそ夢は素晴らしく、だからこそ夢は妬ましい。

だからこそ夢は、時に中毒性の高い麻薬のように、人々を優しくも温かく狂わせる。

だからこそ夢は、月に「科学」と言う虚像を植え付け、我々には空虚な魂を育ませた。

「君は知ってるかい？」

原始的な文明を持つ巨大な蒼に照らされながら、繁栄の象徴となつた男は静かに口を開いた。

「毎夜毎夜、君達が見上げるこの月は、繁栄と共に大切な何かを失つた」

翡翠のように澄んでいながらも僅かに灰色の濁りを含んだ瞳で、空に浮かぶ蒼穹なる星を見上げながら、男は両の腕を大きく広げる。そして、焦がれるような眼差しで　　まるで、自ら穢れを望むかのような表情で空を見上げた。

「私は科学が嫌いだ。この銀色の髪が、この濁りを含んだ瞳の色が嫌いだ。汚れた心が　　傲慢な思想が嫌いだ。だが、君達が持つ穢れが愛おしい。未熟な文明が愛おしい。君の長い髪を輝かせる金の色合いが、紅い瞳が愛おしくて仕方がない」

ただ、歎く。

ただただ、男は己の全てを歎くかのように、堪り兼ねては鬱積した感情を吐き出す。

虚勢と虚栄が、ただの欺瞞が　　胸の中に渦を巻いていた数々の虚しさが肥大しては膨張する。

故にこの場で、堪りに堪り爆発寸前であつた鬱憤や不満、その怒りの果てに生まれた自己嫌悪の全てを　　今まさに吐き出した。

「だから私は、君が来てくれて嬉しい。君と言う外敵がこの月に訪

れた事が、こんなにも喜ばしい。ハハッ                    八八八ハハッ！！」

言うや男は、自らの体を抱きしめ狂ったように笑い出す。

これで、自分は救いを得た、と言わんが如く、歡喜の表情を浮かべ高々と笑つ。

「ハハ、ハ                    嗚呼、これは大変失礼した。先ずは名を交換しなければならぬ。改めて始めまして、我が待ち望みし侵略者よ。私の名は、この月を統べる者だ」

「……………」

「おっと、そんな顔をしないでくれ。私は今、この出会いを心の底から喜ばしく思っているんだ。だから君の名を、私に教えてはくれないだろうか？」

男は笑みを浮かべ、自らが侵略者と呼んだ女に名乗りを求め。しかし、女は訝しげな表情で男を睨むだけで、いつこつに口を開こうとはしない。

それどころか、全身からは空気を焦がす程の殺気を放ち、今にも襲い掛かりそうだ。

「参ったな。私は君に敵意を抱いていないのだがね」

言つて、やれやれ、と男は肩を揺らした。

「何故、君はそんなにも敵意を含んだ目で、私を睨むんだい？」

「……………」

「これは実に困った。いやはや仕方がない。言葉だけではなく、形で示すでしょう」

そう言いながら苦笑をこぼし、男は両の手の平を女に向けた。その姿は降参の意思を表すソレで、自分には争う気が皆無である事を意味する。

「何故」

と、今まで沈黙を守っていた女が、唐突に口を開いた。

「何故、貴方は私の所に現れたのかしら？」

「ハハツ、最初は質問だから　いや、悪くはない。だから気を悪くしないでくれ。それで、君の言う何故とは？」

「何度も言うつもりはないわ。何故、貴方は“私”の前に現れたの？」

男が降参の意思を示した事により、女はようやく口を開く。

だが、その口調はとても堅く、殺気を治める気配は微塵も感じられない。

「ふむ、成る程。つまり君はこう言いたいのか、“何故、私が事的首謀者だと気付いた”。そして、その事に気付いていながらも、“わざわざ私の前に現れたのは何故”、とな。嗚呼、それは実に最もな質問だろう」

うんうん、と何度も頷き、男は両の目を閉じる。

そして、数秒の間を置いてから見開いた。

すると 先程までは翡翠を思わせていた緑の澄んだ瞳は、闇夜を思わせる黒へと色を変える。

「私の能力は少々特別だな。どんな環境や能力であれ、例外なく無限に適応していく。この能力を視力に応用させれば、如何に君が己の存在を屈折させようとも、私が望めば必ず真実を映し出してくれるのだ」

そう言って男は目を閉じ、数秒の間を置いた後 改めて見開いた。

すると、そこにはすでに先程の黒はなく、透き通った緑が翡翠の如く灯っていた。

「へえ、そうでしたの。なら、普通に逃げる分には問題ないのね」

「まあ待て、私は君に何かをするつもりはない。そもそも、まともに殺り合えば私が不利だ。それに、わざわざ月まで来てくれた。それだけで、それだけで私の願いは、長年の夢は叶う。だから君には、心からの感謝を伝えようと思ったのだよ」

「そんな、感謝なんて言われなくても、私としては困ってしまいませんわ。ねえ、お断りは出来ませんか？」

「まあ、そうは言わずに貰ってくれ。何故ならこれは、私の遺言になるのだから」

瞬間、地面が爆ぜる。



男の踏み込みによって、大地が音を置き去りに陥没する。  
そして、勢い良く女へと迫った。

「ッ!？」

突然の殺気に当てられた女は、咄嗟に腕を前へと突き出した。

それは、彼女の中に存在する防衛本能が、無意識のうちに働いたが故の行動。

それと同時に、自身の背後に逃亡用の隙間を開く。

この二つの動作は、彼女にとっては当然の行動と言えよう。

しかし、その当然さが男の狙いであり、今回は彼女のアダとなる。

結果として、この時この瞬間、月と幻想郷の關係に完全な亀裂が走ったのだ。

「貴方 いったい、何のつもりなの？」

「ふっ、見たまんまだよ。私は最初から、君に殺されるのが目的だった」

友好的に話しを進めておきながら、男は唐突に女へと襲い掛かった。

その理由に付いて男は、“端から相手に殺される事が目的だった”、と言っつ。

そう、だからこその特攻。

故に、男は満足げな表情を浮かべては何度も頷く。

何故なら、突然の事態に女が前へと突き出した腕は、男の胸部に肘の間接まで突き刺ると、背中へと貫通しているからだ。

一般的な常識で考えれば、即死ですら有り得る状況だった。

「嗚呼、君には改めて礼を言おう。下界からの侵略者よ、私は君に感謝する。私を殺してくれて有り難う」

「本気で言ってるのなら、せめて理由ぐらいは教えなさい」

一人だけ満足した表情を浮かべる男に、女は問い掛けた。

「何、下手に地位や信者を得てしまうと、こうでもしなければ死ぬ事が出来そうにないからさ」

「あら、ずいぶんと軽い理由なのね？」

「それは偏に、月の世界は醜い醜い文明社会だからだよ。だから我々は他者や地上の民を見下し、異常な程の潔癖性を持つんだ。そして、私はそれが嫌いでな？」

「……………」

「まあ、言っても分かりはしないか。さて、そろそろあの娘達がここに来てしまうか。目的は果たし時間もないので、これでお開きにしようか。ああ　それから、君はちゃんと私に止めを刺して帰ってくれよ？」

言って男は、ずるり、と自らの胸から女の腕を引き抜く。

胸に風穴の開いた男は、痛みを訴える事もなく笑う。

傷口から流れる血に染まりながら、嬉しそうに笑った。

一瞬、その笑顔に女は難しい表情をするも、小声で何かを呟くと隙間の中へと消えて行った。

「これで、やっと解放される」

男は薄れゆく意識の中、後ろから近付く二つの気配に別れを告げる。

何度も何度も、心の中で謝罪を繰り返しながら、同時に感謝の言葉を繰り返す。

“有り難うとさよならは、何故か同時になった。”

「先生」

膝が折れ、体が倒れるその間際、月を去った恩師の事を思い出す。

「僕、頑張ってみたんだよ。でもね、僕は人の心を捨て切れなかった。そんなに時は経ってないと言うのに、僕はもう限界なんだ。貴女の教えだけが、唯一の救いだっただ」

自らの勝手を呪いながらも、体はゆっくりと地に倒れ、視界が自然とソレを見上げた。

“嗚呼、穢れけがとは何とも美しき心かな。

それは、人が人である証ではないか。

意味を持った魂を持っていると　己を誇示していると言う確固たる証拠なのだと、そうは思わないか？

口元に薄く笑みを浮かべながら、一人の男が安らかな眠りに付いた。  
いつからか、自身の国である月を憎み、地上に焦がれた一人の男が。

輪廻の渦に飲み込まれた。

時は変わり、一人の少年が月を眺めていた。

ぼんやりと、十六夜の月夜を見上げた少年は、金色の輝きに笑みを浮かべる。

毎夜毎夜、そこに輝くだけの月と、見上げるだけの自分。

何故か焦がれる。

少年は己が嫌いだ。

銀色の髪が嫌いだ。

半人半妖の血が嫌いだ。

自分を取り巻く全てが嫌いだ。

だが、水を覗き込んだ時に映る金色の瞳だけは、不思議と嫌いなれない。

その金色の輝きが、少年に向けて『頑張れ』と言っている。  
少年は水に映る自分の瞳を見る度に、そんな気がしていた。

「 うん。僕、頑張るよ」

泣き腫らして真っ赤に充血した目を、少年はゴシゴシと着物の袖で擦っては、頼りのない足取りで歩き出す。

大嫌いな場所へ、大嫌いな母の下へ。

## 日進月歩（後書き）

どもです。

ストーリー自体は結構前から完成していて、ただ未公開のままお蔵入りさせようとしたヤツです。

まあ、俗に言う「魔改造物」ってヤツですかね？

出来てるヤツに手を加えるだけなので、暇を見て公開していく感じ  
です。

言っちゃえば、色々と行き詰まった時の息抜きな作品です。

では。

閑雲野鶴（前書き）

んな訳がない。

こんな風に生きたい。

それは、誰もが胸に思い描く理想の地図と、運命と名付けられた  
気まぐれな羅針盤が、唐突に指し示す方角と基点だ。

そして、時にはそれらを大事そうに眺める夢追い人の姿に、第三  
者達は『彼、彼女も自分と同じだ』と、親近感を得るのだろうか？

……若しくは、『彼、彼女は自分とは違う』などと、疎外感を得  
るのだろうか？

また、ニヒリスト虚無主義者 実在や真理、また既存の社会秩序・権威

などを否定する立場にある彼らは、どんな夢を観るのだろうか？

未だ夢には定義もなく、漠然とした形を表す比喻表現としても使  
われ、皮肉や中傷的な意味にすら使われる。

だが、もしかすると彼らもまた『夢は夢だ』と、万人と何ら変わ  
らぬ夢の地図を思い描くのかも知れない。

そう……つまりこれらは、人々が個々として存在している限りは、  
永遠に続く謎なのかも知れないのだ。

……だが、実に不明瞭なそれらは、結局の所が一つの夢でしか  
ない。

それはつまり、そのどちらにせよ夢は夢でしかないのだから、全  
てが全て分かり合える訳ではないのだと……只、そこに落ち着くだ



けだった。

しかし、夢と言われる固有名詞の中にも、不完全なりに証明されている事が存在する。

それは、『人が睡眠中に観る夢とは、願望充足を施す物である』と言う事。

なら、夢と言う形で触れた漠然とした景色や漠然とした会話、個々になる漠然とした思考達……その全てが、叶うはずもないと諦めていた理想の残骸ならば、心の羅針盤は実に意地悪な存在である。

……が、それらは最早、人々が『こんな感じの物なのだ』と、誰もが分かりやすく認識する為の基準と置かれた物でしかない。

つまり、それは基調と言われる物であり、基調とは所詮が只の基準でしかなく、物事や思考の基本的な傾向でしかないのだ。

だからなのか、ゆらゆらと落ち着きのない羅針盤の針は、時に漠然とした絵空事から顔を反らし、当たり前前の日常にすら指針を向ける。

食事、会話、仕事、喧嘩や恋愛と言った様々な触れ合いの数々など、日常の風景からすれば何ら特別とは呼べないそれらが、時には特別な物へと姿や形を変えていく。

もしかしたら、幸福な生活を手にする為に必要な要素とは、そんな些細な物なのかも知れない。

つまり、夢として描かれる風景の中にも、そんな物が確かに存在するのではないだろうか……

閑雲野鶴が如く、何者にも束縛されず、自然の中でゆうゆうと暮らす境遇を望む。

商売にせよ趣味にせよそこに違いはなく、それが彼の望む理想の

暮らし。

未来あすに求める確かな在り方。

それが 彼が唯一、幻想郷、に望む、理想の暮らしだった……

蝉が鳴く。

蝉が夏を彩る。

蝉が鳴く。

蝉が夏に生まれる。

蝉が鳴く。

蝉が夏に死んで逝く。

蝉が鳴く。

蝉が鳴く。

蝉は鳴く。

蝉は鳴く。

そう、蝉は夏に生まれ夏に死んで逝く。

そつ、蝉とは夏に鳴く、存在<sup>いのち</sup>だ。

蝉。

彼らは自らに定められ短命さを呪う事なく、その僅かばかりの時間を鮮明にと、限られた命を削っては夏を象徴する。

ミンミン……ミンミン……と、その鳴き声を耳にする者達の鼓膜を激しく揺らしては、夏の暑さをより強く体感させる。

その行いは憎むべきか、または『有り難い』と感謝すべきか……どちらにせよ、蝉は夏の風物詩だ。

少々の鬱陶しさは確かに存在するが、やはり夏を装飾する生き物の代名詞だろつ。

……しかし、これは視点を少し変えて考えれば、酷く失礼な見方だとも言えよう。

何故ならば、白日<sup>はくじつ</sup>の下に響く蝉達の耳障りな鳴き声は、自身等の生殖を行いながらも、我々に何らかの連動を求めているかも知れないからだ。

則ち、彼ら蝉達の行いは本来ならば尊ぶべきか……または感銘すべき生き様なのかも知れない。

だからなのだろうか、夏の嚆矢<sup>しゆじ</sup>を蝉の鳴き声に教わり、蝉の鳴き声と共に涼を求める人も居るのは……

「……………」

……とある屋敷の一室にて、青年は蝉の鳴き声を聞く。

青年は現在、畳の上に正座をしながら、音を立てずに茶を啜<sup>すす</sup>っている。

真つ直ぐに伸びた背筋と湯呑みを持つ手と、その対になる手の添え方からは品の良さを感じさせ、精巧に整えられた目鼻立ちきは実に利発そうだ。

そして、季節は正に夏だと言うのに対しその表情は実に涼しげで、僅かな暑さをも周りに感じさせない。

……つと、何処からか、ドタドタと慌ただしくも走り来る音が聞こえる。

その足音はだんだんと近付くと、次第に勢いを増す。

そして青年はその音を聞きながら、湯呑みを置いては溜め息を吐いた。

……その時、足音の主が姿を現す。

「オウオウオウ、えれえー待たせちまったなあ霖之助ッ！」

「……お、親父さん。貴方はもう少し静かに出来ないんですか……」

大声を上げ、勢い良く現れた壮年の男に、青年

もりちかりんのすけ  
森近霖之助

は手の平で頭を押さえながら、呆れを含んだ口調でそう言った……

「んで、久しぶりに店まで顔を出しに来たってえー事は、お前んとこの店は起動に乗ったのか？」

霖之助の正面で胡座をかき、壮年の男は笑みを浮かべる。

だが、告げた言葉とは裏腹に口元は釣り上がり、見るからに嫌らしい笑みだ。

「それは、まあ……ぼちぼちと言った感じですかね」

霖之助は男から顔を反らし、何処か遠くを眺めるような目で言う。  
……しかし、その目は僅かに泳いでいた。

「ほお〜う……ならお前の店にも、常連の一人や二人ぐらいは出来たんだろっな？」

「……………」

「ん、どうした？ 何故、お前は途端に黙るんだ？」

「いや何、少し暑さが堪えただけですよ。まあ、それも夏ですからね……………」

そう言つて霖之助は着物の襟を開き、手を団扇の要領で扇ぎながら風を送る。

その姿に明白あかひびなごまかしを感じ取つた男は、堪え切れずに笑い出す。

「ク、ククククツ……ア、アアハハハハハッ！！！」

「……親父さん。あまり意味もなく笑い過ぎると、寿命が縮まるみたいですよ？」

「ハ、ハハハハッ……なあ霖之助。お前は、笑う門には福来たるゝつて言葉を知つてるか？」

「……嘘っぱちですね」

「嘘も方便だぜ、つてか？ ……ク、クハハハハッ！！！」

「……………」

腹を抱えて笑つ男の姿に、霖之助は冷めたい視線を送ると、長く深い溜め息を吐いた。

「やれやれ、貴方は本当に変わらない……………」

「ク、ククツ……ま、まあ良いさ。折角の顔出しだ、取り敢えずはゆっくりしてけや。それで、家の娘っ子に会つてけよなッ！！！」

「……彼女が良いと言つのなら、僕は別に構いませんけど……あの娘は、魔理沙は僕の事をまだ覚えていますか？」

霧雨魔理沙。  
きりぬめ まじな

男の娘であり、霖之助がこの店を独立するまでの間、良く面倒を任されていた少女の事を指す。

そして、その魔理沙なのだが……何故だか分からないのだが、彼女は昔から霖之助に良く懐き、『こーりん、こーりんッ!!』と舌つたらずな口調で霖之助の名を呼びながら、彼の後を付いて歩いた。彼女の親でなければ、また兄弟ですらない霖之助の背中を、楽しそうに追い掛けた。

人間ですらない彼の 只の世話係の後ろを……

「残念ながら、忘れてねえ〜んだよなこれが……」

「へえ……それが本当なら、随分と物覚えの良い娘ですね？」

「嗚呼、全くだぜ。親としちゃあ不思議な話しだったのよ……何せアイツは、ここ最近まで俺の顔なんかろくに覚えてなかったんだからな。全く、本当に不思議な……いや、複雑な気分だぜ」

男は拗ねた子供のように唇を尖らせると、そう言うては愚痴をこぼす。

それと同時に、正面に座る霖之助を見る目が、少しだけ恨めしそ  
うだった。

「後者に付いては、僕からは何も言えませんが……ええ、不思議と言われれば、確かにそうですね。僕が魔理沙の面倒を任されていたのは、あの娘が四つの頃から五つになるまでの一年間だけ……普通なら忘れてしまつてでしょう」

「んあ〜……まあ、そう言う訳じゃねえ〜んだけどなあ……」

男は頭をポリポリと掻きながら、霖之助の言葉に苦笑すると、戯おどけるように肩を揺らして言った。

「実はよ……あれからアイツは、お前以外には懐かなかつたかわ。古くから店の番頭を任せてる与作にも、お前の後に世話を任せた若いのにも、いっこうに懐く気配がねえ〜んだわ……」

「まさか、そんなはずはないですよ。それは単純に、魔理沙が難しい年頃になったのか、大人が嫌いになる程度の自我を持ったから……若しくは、異性をちゃんと認識しているから、じゃないですか？」

言いながら、霖之助は口元に薄く笑みを浮かべると、胸の内ですつ囁く……

やはり、変わらないと。

この男、確かに口は悪いが、娘の事を大切に想っている。その事を良く知っているから……その事が良く分かるから、霖之



助は笑みを浮かべたのだ。

昔に、初めて会った日から、本当に変わらない人だと……

「……………」

「……………ん？　　どうかしましたか、親父さん？」

唐突に黙り、意味ありげな瞳を向ける男に、霖之助は首を傾げた。

「まさか霖之助……………」

男はゆらりと身を揺らすと、感情の一切を殺したかのような笑顔を顔に貼り付け、霖之助の肩を「ガシリ」と掴む。

「な、何ですか？」

「まさか……………まさかとは思いが、お前に限ってまさかと思っちまうんだが……………」

ゆっくりと、次第に近づく男の顔。

能面な笑顔と、肩を掴む腕に込められた力は、男の心境を僅かばかりに物語る。

だからか、その男に対し『このままでは何か〴〵がいけない』と、

霖之助はあらゆる意味で嫌な予感を覚える。

「まさか、まさか霖之助……お前は、未だ幼かった魔理沙に、変な事〴〵をしたり……してないよなあ？」

「……………は？」

霖之助が感じた嫌な予感は、物の見事に的中した。

そして、瞬時に『どうした物か？』と、頭を抱えなくなった。

「未だ少女だった……いや、幼女だった魔理沙に、如何わしい事をしたりなんか、してねえよなあッ!？」

「……………ま、待ってくれ親父さん。いったい、何処をどうしたら、話しがそつちに飛ぶんだい？」

「い、良いからスパツと吐けや霖之助ッ!! 家の大事な一人娘に、お前は道徳や風紀に反する事をしたのかどうか……ハキハキ答えるや、霖之助ッ!?!？」

勢い良く唾を飛ばしながら、男は目を真っ赤に血走らせて叫ぶ。

同時に、霖之助の肩を掴んでいた腕がギリギリと音を軋ませ、万力のように絞め上げた。

「お、親父さん……僕はそんな趣味を持つじゃない。だから、魔

理沙に関しては心配要らないです。ええ、本当に心配無用です」

「……嘘じゃねえーだろうな？」

「天地神明に誓って、僕は魔理沙に不埒な行いはしてません。そもそも、行つような考え自体ありませんよ……」

暫くの間、男は霖之助の顔をジツと見つめる。

そして、肩を掴んでいた腕を離しては身を引き、何事もなかったような顔で、ズズズツと茶を啜<sup>すす</sup>った。

そう……、霖之助の茶を啜<sup>すす</sup>った。

「ふう……こりゃ温いな。ついでに言えば、渋味が強過ぎる。これじゃ駄目だな……上等な客を持て成すのは、この茶じゃあ先ず無理だ」

「……人の飲みかけを勝手に飲んだくせに、なかなか言ってくれま  
すね……」

「あ、あ？　オイオイ霖之助エ……この茶は、マズイ。これは  
事実だから仕方ないだろ？」

言つや男は湯呑みを置くと、腰を手で押さえながら立ち上がる。

一見すると未だ未だ若々しく、元気に見えてしまふのだが、『やはりそれなりの年齢を迎えている』のだと、霖之助は改めて気付か

された。

やはり、人は短命……その一生は正に、蝉が如く。

彼ら人間達からすれば、ひと夏の蝉（短命）。だが、妖怪等と言った人外の者からすれば、彼ら人間こそが、ひと夏の蝉（短命）を体現している。

霖之助は無意識のうちに目を細めると、自身の生い立ちを走馬灯のように思い浮かべる。

半人半妖と言う身が理由に村八分にされ、人々から汚らわしい物を見るような目で見られた事。

実の母に殴られ、監禁された事。

三度の食事に、毒を盛られた事。

毒によって苦しみがく様を、只の毒では死ねないこの身を……

まるで薄汚れた生ゴミを扱うかのように、疎み虐げ続けた母や

村人達の姿を……

「親父さん」

だからこそ、霖之助は頭を振るい、男に優しく微笑む。

だからこそ、霖之助は恩を受けた男に、その身を労るように告げる。

「……たまになら、魔理沙の遊び相手ぐらいしてやれます。間接的になら、店の手伝いぐらいしてやれます」

親父さん……僕は人ではないけれど、貴方に人の温かさを教わった。

だから、多少は生意気かも知れないけれど、これぐらいは言わせて貰うよ……

「だから 困った事があった時は……遠慮せず、何でも言っ  
て下さい」

そう言いながら、霖之助はゆっくりとした動作で立ち上がり、部屋の出口へと歩き出す。

「今日はこれから、未だ他に用事があるので、魔理沙に会う時間はありませんけど……また、暇を見て顔を出しに来ます」

男の脇を通り過ぎる瞬間、霖之助はそう言って部屋を出て行った。

そして、男の返事も、見送りを待たずに屋敷を後にする。

其ノ式へ続く……のじゃ。

閑雲野鶴（後書き）

やはり、んな訳がない。

## 其ノ式（前書き）

キャラの関係は、鉛筆転がして決めました。



## 其ノ弐

其ノ弐

切る。

鞘走りが風を切り、月夜の下に銀光を走らせた。  
そして……それが、赤い飛沫を生み出した。

そう、只々 切る。

我が身を守る為、僕は刃を赤に染め上げる。  
痛みを訴える悲鳴を、命乞いをする瞳を……妖怪も人間も、その  
命を切る事で、僕は、この世界に生きる。

憎しみも悲しみもない世界で、深い夜の世界で数多の命を奪い、  
僕は、はまた生き永らえる……

切って……切って、切って、奪っては殺して……何かを得  
た。

けれど、何かを得た代償として……血と脂の生々しい臭いが、両  
の手から離れる事はなくなった。

だから、死にたくて仕方がない。

だから、消えたくて仕方がない。

だから だからきつと、いつか何処かの誰かが、この狂った  
魂を静めてくれる事を願いながら……僕は待つ。

だから 僕は見上げる。

苦痛もなく、快楽もまた存在しない空虚な夜に……

僕はまた、`アノ`醜い月を見上げてしまつ。

思い出とは、罪深い物だ。

何故なら思い出とは、物事や人物に優劣を付ける基準となるからだ。

新しい環境や関係を、前例と言うフィルター越しに見せるからだ。  
私達に、あの`時`は あの`人`はと、身勝手な見方を植え付けるからだ。

だからなのか……思い出とは、実に恐ろしい。

何故なら、人は様々な記憶を元に、人格を固定するからだ。

例えば、人を人とは思わぬ所業しよわざの果てに、人は己を正当化する。

例えば、完全、完璧と呼べる物を求める事で、必要な無駄を根絶しては、不要な無駄を生み出す。

だから我々は、不明瞭な物を嫌い、時には憎む。

だが、追求したその先で、明確さに葬られる。

無味乾燥を嫌うのならば……何故、我々は皆、大切な無駄に気付かないのか？

何故、有限と言う価値を無にする永遠に、縋り付こうとするのか？  
何故、もう過ぎ去った過去に、安易な逃げ道を作るのか？  
それ全て、見果てぬ人類の記憶達が、世界に巣くっているから。

故に、記憶は怖い。

記憶とは、実に危うい価値観だ。

概念とは、実に胡散臭い都合だ。

人とは、実に馬鹿馬鹿しい弱者だ。

妖怪とは、実に弱々しい強者だ。

これら、対となるその全ては、避けられぬ「矛盾」によって成り立つ。

つまり、永遠とは一つの無であり、無限の終わり。

同時に、有限とは無限の一であり、限り有る始まり。

しかし、世界の記憶達が都合良く描いた答えには、その「矛盾」が存在しない。

だから、我々には式が成立しない。

だから、我々には永遠など成立しない。

即ち、人が生きる事に、価値は生まれない。

何故なら、価値とは所詮が、人の生み出した意味だからだ。

……ならば、意味とは無味で終わり、無味とは意味に還る物。

当然、その逆もまた然り。

そう、つまり「諸行無常」とは、まさにこの事だと言えよう。

それが故に、混ざり者とは、実に嘆かわしくもあり、実に

愛おしくもある穢けがれなのだ……

「すまない兄さん。呼んだ本人が、待たせてしまつて……」

思考の渦に囚われた霖之助の意識を、凜とした声が呼び戻す。

「……何、君が気にする事はないよ、慧音。君が遅れたお陰で、僕は久しぶりの人里を堪能出来たよ……感謝している」

感謝。

そこには、二重の意味が存在する。

茶屋に立ち寄り、団子を頬張りながらもぼんやりと人の波を眺めて居た霖之助は、思い出したくもない物を思い出そうとしていた。

もし、あのまま……過去の自分に囚われていたら……

そう考えると、彼の言葉には、確かな感謝の意が込められていた。……しかし、それが誰にでも通用する考え方ではないのも、確かな事なのだ。

「感謝か……本当にそうなら良かったんだけど……悲しいかな、単なる嫌味にしか聞こえないのは」

バツの悪そうな表情で、霖之助へと応えるのは、とても美しい女性だった。

「やれやれ……それは、単なる被害妄想と言っちゃつさ……」

「じゃあ、聞くけど……本当に嫌味じゃないのかい？」

「……………」

「……ほら、やっぱり嫌味じゃないか」

呆れたように言う女性　慧音に、霖之助は『正直な所、否定は出来ないな……』と内心で呟き、咳ばらいを一つしてから、ゆっくりと腰を上げた。

そして、事のついでと、勘定を椅子の上に置き、さっさと歩き出す。

「へえ……どうやら兄さんは、状況が悪くなったからと、話しをはぐらかす了見だね？」

「……失礼な。僕は只、歩きながら話をしようとしただけ。先程の話しをはぐらかすつもりは、僕には毛頭ない」

「じゃあ、弁解をさせてあげるから、さっきの続きを話そうか」

言いながら、慧音は口元に挑発的な笑みを浮かべると、歩き出す霖之助の横へと並んだ。

「慧音……君は、つくづく困った妹だ」

霖之助は溜め息を吐き、女性……慧音の言葉に肩を揺らした。

女性の名は、かみしらさわ上白沢慧音けいねと言い、姓の違いからうかが窺えるように、霖之助にとっては義理の妹となる。

その容姿は、先程述べたようにとても美しく、少しだけ霖之助に似ていた。

だが、その身から感じられる雰囲気は、半人半妖の霖之助とも、里に住む人間達とも、僅かにだが違っていた。

「私は物心がついた頃から、兄さんの背中を見て育ったからね。揚げ足を取るのには、人一倍に得意なのさ……特に兄さんのはね」

「成る程ね。要するに、君に嫁の貰い手が来ないのは、全て僕のせいである……つまり慧音は、そう言いたいんだね？」

「むッ　　そ、それは関係ないじゃないか」

霖之助の言葉に、慧音は拗ねたように唇を尖らせる。

その仕種は、彼女の持つ知的で大人びた雰囲気を一瞬にして少

女のような可愛らしい物に変化させた。

……その少女を窺わせる表情が、どれ程に彼女の魅力を上げてくれるか、それを本人は分かっている。……

霖之助は拗ねる慧音を横目に、改めて溜め息を吐いた。

何とも勿体ない。

幼少の頃から、将来は美人になるだろうと思ってはいた。

だが、自分と同様、純粋な人間とは言えない慧音に、人の幸せを唱えるつもりはなかった。

……しかし、大人へと成長を果たした慧音を見る度に、霖之助は改めてそう思ってしまう。

銀を基調にした色に、僅かな薄い緑を含ませた長い髪は、幻想的な魅力を生み出している。

長く綺麗に跳ねた睫毛まつげと、キリリとした切れ長の目尻は、彼女の知的さをより強く表す。

だが、そこに潜ませた色は慈愛を窺うかがわせ、同時に深い優しさを感じさせる。

すらりと伸びた四肢、豊かな胸元と括れた腰周りなど、体付きも非常に整っていてとても女性らしい。

現に、通りに行く行人の何人かが、擦れ違い様に慧音の事を眺めては、惚けた顔で溜め息をこぼしている。

それも、若い男に限らずにだ。

……つとは言え、それも仕方のない事だろう。

先に述べたように、それ程に、上白沢慧音かみしろさわけいね、と言う女性は、凜と咲いた美しい花なのだから……

嗚呼、ゝ 実に勿体ない、と……霖之助はつくづく思う。

これ程の器量良しだ、異性に対して壁を造らなければ、良縁はいくらでもあっただろうにと……日頃から、彼は残念に思っていた。だが、それと同時に霖之助は、彼女の容姿を目当てにやって来るだろう男達を危惧し、彼なりに警戒していたりもする。

つまり、お互いがお互いに、いくらでも来ただろう良縁を、徹底的に遠ざけているのだ。

そう考えてみると、実に似た二人なのかも知れない。

っと、

「それより兄さん、あの娘は元気にしてるのかい？」

思い出に浸る霖之助の思考を遮るかのように、慧音は話しを振った。

「……あの娘とは？」

「兄さんの店で唯一と言える従業員。加えて、唯一と言える看板娘の事だよ」

「……ふむ……」

ゝ はて、看板娘など、僕の店に居ただろうか……いや、そ



もそもが、従業員すら居ないぞ？」と、霖之助は首を傾げた。

「……………ハア」

その、見当すらも付かないと言いたげに首を傾げる霖之助に、慧音は溜め息を吐き、若干の呆れ含んだ口調で言った。

「道具屋の兄さんは、道具である傘を大事にしないのかい？」

「まさかとは思いが……………君が言っているのは、小傘こがさの事かい？」

「そうだよ、あの可愛らしい傘娘の事だよ……………それより、兄さんみたいな甲斐性なしの下で、健気にも尽くしてくれる娘が分からないのは、男としてどうかと思うよ？」

そう言って、慧音は霖之助の顔を横目に見上げる。

そして、仕方のない兄をからかうかのように、くすくすと口元に手を添えながら笑った。

その姿に霖之助は、『やれやれ、言うようになった……………』と、再び内心で呟きながら、足元へと視線を向けた。

……………夕日に当てられ、赤く染まった地面と、同じように赤く染まる二人の横顔。

歩く度に頼りなく揺れる、二つ並んだ不揃いの影。

それは、霖之助と慧音……………二人の身長差が故の差異だ。

さらに付け加えれば、それが故にやや上目遣いな慧音の視線が、

霖之助には何とも言えなかったのだ。

だからこそ、霖之助は苦笑をこぼして、話題を反らす事にした。

「確かに傘は道具だ。けれど、小傘はただの道具じゃないよ？」

「勿論、そんな事は知ってるさ。だから私は、唯一の『従業員』と聞いたんだけどね……」

「……………」

「おや、言い返さないのかい？」

慧音は笑う。

内気で無口だったかつての自分が、今では口の達者な兄をからかうようになった。

その事実が、慧音には楽しくて仕方がない。

「何が面白いんだかね……それで、久しぶりに会ったんだ、話しはそれだけじゃないだろ？」

「まあ、ね……………」

「歯切れが悪いようだが、どうかしたのかい？」

言葉を濁す慧音に、霖之助は不思議そうに聞いた。

「……実は今日、兄さんに相談したい事があるんだけど……」

「僕に相談事かい？」

「まあ、そうなんだけど……聞いて貰っても、構わないかな？」

何故かは分からないが、言い難そうに言葉を濁すと、慧音は顔を俯かせる。

その俯き加減の表情は、とても複雑そうで、霖之助は少し心配になった。

「僕は構わないけど……君が僕に相談があるなんて、珍しいじゃないか？」

「別に、珍しくもないさ。今までは兄さんに頼らなくても、自分でどうにかしていたっただけだよ……只、今回はかりは、色々と複雑な事情があつてね……」

「ふむ……分かった。取り敢えず、話してみてくれ。勿論、相談に乗れるか乗れないかは、それからの話だよ？」

霖之助はそう言って、薄く笑みを浮かべると、茜色に染まった空を見上げる。

そして、沈む夕日を眺めては、眩しそうに目を細めた。

「有り難う。兄さん」

夕焼け空の下、不揃いの影が揺れる。

ふと空を見上げれば、山並みの向こう側へと目を向ければ、飛ぶカラス達が淡い霞みの中へと溶けて行き、幻想郷に夜を告げようとしていた。

そろそろ、人に在らざる者達が蠢く時間だ。

大輪の太陽は、東に生まれ西に花卉を寝かす。

されど、決して悲しむ事はなかれ。

決して、哀れむ事はなかれ……

「涙を拭い空を見よ、天に咲くは月の花

か……」

昼と夜の入れ代わりを待つ世界の下、慧音の告げた感謝の言葉を耳に、霖之助はそう呟いた……

## 其ノ式(後書き)

次はダーツです。

つてか、高機能は使い方間違えると、色々ゴチャゴチャになる。

其ノ参(前書き)

文章が地に戻り掛ける。

## 其ノ参

空は何故、何を理由に蒼いのか。

見上げた先では、早々と雲が流れ、太陽が照り付ける。

それは 見事な晴天。

その自然が生んだ恩恵の下、飽きもせず今日も考える。

生まれたばかりの少女は 身動きの取れない体で、流れ行く雲を見上げながらも考える。

何故、蒼い必要があるのか。

何故、蒼い必要があったのか。

その二つを考え、そして悩み、矛盾を生み出す事となる。

入道雲は嫌いだ 何故なら、空を覆おほうからだ。

晴天は嫌いだ 何故なら、己の意味を奪うからだ。

だが、空に太陽が昇らなければ、空は蒼く澄み渡らない。

だから仕方ないと、諦めと共に感謝をする事にした。

蒼く、広く、そして 優しい空……貴方はきつと、自分を見  
てくれている。

貴方はきつと、自分を必要としてくれるだろう。

だからきつと、待ち続けた。

……けれど、誰一人として、自分を求める者は居ない。

巡る日も巡る日も待ち続けたが、自分を迎えに現れる者などいない。

待てど暮らせど、誰一人として、自分を必要としない。

悲しい……悲しい……けど、そんな事は、始めから気付いていた。こんな場所で、景色に埋もれた不細工で古びた道具などを、今さら捨てる者は居やしない。

どんなに望もうと　　どんなにあの蒼い空を眺めていようと、こんな私を使う者など居るはずがないと、少女は最初から理解していた。

ないかな？　　ないよね。

きつと、来ないよね

……長い時間、長い年月を、少女は諦めず待ち続けた。

希望を……意義を叶えてくれる誰かが来るのを、諦めず待ち続けた。

朝も、昼も、夜も変わらずに……雨も、雪も、嵐でさえも耐え、ずっと待ち続けた。

そして、疲れた。

自由とは何だろうか、己の存在意義を見失い、虚妄の出会いに焦がれ、報われぬ現実に渴望して、少女が手にしたのは　　只の孤独。

そして、作り物の心は次第に摩耗し、潤いを求める事を放棄した。最早そこには、希望など何一つとして存在しなかった……

話す相手など、一人も居ない。

話せる相手など、先ず居ない。

使ってくれる持ち主など、最初から居ない。



何故なら                    その身はしがない、<sup>かさ</sup>道具だから……

く其ノ参く

奇跡が欲しい。

……だが、三度は要らない。  
何故なら、それは必然だからだ。

奇跡が欲しい。

……だが、二度は要らない。  
何故なら、望みは二つもないからだ。

奇跡が欲しい。

……たったの一度、たった一回だけの奇跡が欲しい。  
誰かの頭上で誰かの身代わりとなり、灰色の雲から滴<sup>したた</sup>る冷たい雨  
を受ける瞬間が、自分の役目を果たせる機会が……一度だけでも巡  
ってきて欲しい。

でなければ、せめて誰かの目に止まりたい。

このまま朽ち果てるのは、道具としてあまりにも悲しい……寂し

い……そして、悔しい。

それは、いつから生まれた自我なのだろうか……

長い時を孤独に過ごし、いつか来たる持ち主を待ち続けた。道具<sup>かぎ</sup>は、魂と器を授かった。

だが、その代償として、道具<sup>かぎ</sup>は深い痛みを知った。唯一の願望、意義、価値、意味……その満たされない心達に、氣付いてしまった。

……だから、道具<sup>かぎ</sup>は道具<sup>かぎ</sup>のまま、野ざらしのまま動こうとしない。

当てもなく道を進むなど、原動力のない自分には無理だから……

もしもまだ、唯一の望みが叶うのならば……

空想でも構わないから……嘘八百で塗り固められた、哀れな虚飾<sup>きよしよく</sup>でも構わない。

お願いだから、冷たい雨を降らして。

お願いだから、虹の袂<sup>たもと</sup>を歩かせて。

だって……だって、自分はしがない。道具<sup>かぎ</sup>でしかないのだ。

だから 只々、誰かの為に、冷たい雨を凌ぎたい。

儂い<sup>はかない</sup>夢幻の中だけでも、誰かの手に取って欲しい

「君は 何故、そんな所で寝ているんだい？」

人の声 それは、自我<sup>わたし</sup>を確立させてから、初めて聞いた人の言葉。

道具の自分に話し掛けるなんて、人間って変な生き物なんだなと、最初はそう思った。でも、その瞬間、心の中では……、ナニカがカチリと噛み合っていた。

ソレは、皐月こがつの五月雨が呼んだ、偶然の出逢いだった。

……

人間の里から魔法の森へと向かって行くと、森の入り口に奇妙な建物が一軒、ぽつりと建っている。

その建物は、外も中も道具なのかゴミなのか分からない物達で埋め尽くされながら、薄暗く物静かな森の入り口で確かに存在していた。

ガラクタと掘り出し物、その線引きが難しい物ばかりが列ぶ。

このような訳の分からない物ばかりがごった返しては、いったい何の役に立つのだろうと、目にした誰もが思っのかも知れない。

だが、そこには魔法の道具から妖怪の道具 果ては冥界の道具までもが、商品として置いてある。

それどころか、幻想郷で唯一、外の世界の道具、すらも扱っている店。

……そう、そこは変わり者の半人半妖が商いをする道具屋。

その名を

香霖堂、と言った。

.....

どすん。

物が倒れる音。

それは、平で重く長い物が、ゆっくりと倒れる音。

「あ、あうう……」

潰された蛙のような、弱々しい掠れ声が室内に響く。

声の主は、現在 本棚の下。

倒れた本棚の下敷きになり、身動き出来ずにもがいていた。

「う、ううう……せ、折角、ご主人から頂いたお仕事なのに……」

ずりずりと、体に覆いかぶさる本棚から上半身を這い出し、潰れた蛙は歎いた。

自分は何と情けない と、重い本棚に潰された事に痛みや悲しみを訴えるのはなく、自身の失態を歎いた。

「それよりも……ど、どうにか抜け出さなきゃ」

倒れた本棚から上半身を露あひわにさせ、声の主　　少女は室内を見渡した。

きよろきよると、誰も居ない室内を見渡す。

そして、隅の一角へて視線を留めると、主の言葉を思い出す。

「　じゃあ、僕が帰るまでの間、店の掃除と商品の陳列を頼んだよ。」

少女は大切な主人に頼まれ、昼前から店の掃除をしていた。

売り物の簡単な手入れと、本棚の整理整頓。

特別、難しい事じゃない。

これは、到って簡単な仕事だ。

少女は笑みを浮かべ、壺や皿と言った骨董品を磨き、床の掃除をしながら、商品の新しい配置を考えた。

何、これは　　特別、難しい事じゃないんだと、少女は樂觀し浮かれていたのだ。

だからか、鼻歌を歌いながら店内を歩き、注意すべき足元あしもとを疎かにした。

そして、後で磨こうと脇に置いてた壺に、足を引っ掛け倒してしまった。

「　あッ」

「　ごとり。」

少女が上げた短な悲鳴と共に、倒れた壺がごろごろと床を転がり、本棚へとぶつかった。

鈍い音を響かせ、停止する壺。

壺の衝動を受け、僅かに揺れる本棚。

少女は慌てて、本棚まで駆け寄った。

駄目だ　これは、いけない。

大切な商品が、店の備品が傷付いてしまった。

道具の自分が、仲間をぞんざいに扱ってしまった。

同じ道具として、これだこはいけない　。

少女は慌てて壺を起こし、邪魔にならないようにと脇に置いた。

そして、心配そうな表情で本棚をぺたぺたと触る。

ぺたぺたさわさわと、恐る恐ると言った感じに摩<sup>なす</sup>っては、押して、

引いて、終いには荒っぽくも撫でた。

大丈夫だ、どうやら目立った傷は付いてない。

ふう　と、安堵の溜め息を吐いて、少女は壺へと向き直り手を伸ばす。

主人が帰るまでは、まだ余裕がある。

それまでに壺を元の場所まで運び、また磨き直そう。

そう考えながら、壺を持ち上げようとして……足元に落ちた一冊

の本に気付く　が、既に遅かった。

「あ、あッ!？」

残念な事は、二度、繰り返される。

つまり、少女はまた　足元を疎<sup>おろそ</sup>かにした。

そして、背中から本棚へとぶつかる。

少女がぶつかった事で、棚に収まっていた本はばさばさと、雪崩のように崩れ落ちた。

「あ、あわわわわ　ッ!？」

情けない悲鳴。

少女は咄嗟に腕を広げ、崩れ落ちる本を受け止めようとした。

「またやつちやった」と、己を叱咤しながら。

……しかし、今回ばかりは、歎いている暇はない。

何故なら重しを失った本棚は、少女がぶつかった衝撃によって重心を攫われたからだ。

つまり、ぶつかり寄り掛かれた事によって、ゆっくりと傾き

少女の上へと倒れたからだ。

「どすん」。

...

葉月の空は既に宵の時刻を過ぎ、完全な闇色に染まっていた。

早く帰るはずが、予定よりも時間を喰ってしまったよ　と、

霖之助は痛む体に鞭打って、薄暗い森の中を歩く。

唯一の同居人は、とても心配性だ。

早く帰ってやらねば、要らぬ心配を掛けてしまうなど、霖之助は歩みを速めた。

体が痛い。

服の下で擦れる火傷と打ち身。

打撲と骨折で鬱血した幹部が、ずきずきと痛む。

火傷で生じた水膨れが、じんじんと痛む。

呼吸をする度、彼女に折られた肋骨が激痛を訴える。  
何の手当も施さず、家路を歩いてはいるが……正直、暫くの間は  
動きたくない。

それに、このような時間に里から外れた場所を出歩くのは、自殺  
行為に他ならない。

加えて、霖之助は現在、体中に軽くはない怪我を負っている。  
つまり、人を喰らう者達からすれば、今の霖之助は恰好の餌なの  
である。

弱小たる人間達からすれば、正気の沙汰とは言えない行為だろう。  
故に、血を流し弱った体で森へと歩くと言う行為は、只の自殺行  
為と言える。

だが　　そうは言ってられない理由が、霖之助にはあった。

それは、彼の帰りを待つ者の存在だった。

それに、例え妖怪に教われようと　　自分一人なら問題はな  
いと、霖之助は遠くに灯る明かりに目を細めた。

「小傘はちゃんと、品物の陳列が出来てるかな……」

痛みを紛らわすように言い、霖之助は苦笑した。

あの娘は少々ドジな所があるが、根はとても真面目だ。

明るく素直で、何事に対しても一生懸命なのだ。

只、途方もなくドジな　　いや、努力が結果に結ばれないのが  
たまに傷なだけ。

だから、とても心配だ。

そう　　逆に、心配なのだ。

「また、本棚に潰されてなければ良いのだけど……今回はかりは、  
僕の方が心配を掛けてしまうかな」



嗚呼、碌なもんじやない と、霖之助とはつくづく思った。  
自分は只、香霖堂<sup>カウリン</sup>と言う道具屋を経営するだけのしがたない男  
只それだけ なのだが、何故こうも生傷が絶えないのか。  
どうして、こうも店に居ない時間が多いのか。

今は、どちらでも構わない。

己の不運さなど、考えても仕方がない。

今は店に早く帰る事 それが一番だと、霖之助は視界に入っ  
た建物に、安堵の笑みを浮かべた。

どすん。

何か、重たい物が倒れる音が、香霖堂から聞こえてきた。

ないよな？ まさかね。

きつと、聞き間違えだな

噂をすれば何とやら……

先に懸念した物は、嫌な予感 または虫の知らせだったのか

と、霖之助の額には汗が浮かんだ。

本棚が倒れ、あの娘が潰されている映像が、頭の中で繰り返され  
る。

まさかな。

やれやれと頭を振るい、霖之助は店の入り口へと歩く。

小さな窓から、僅かにこぼれ落ちる明かり。

それは、人気のない森の入り口を照らす。

里に住む人間と、そうではない者達の境界線 半人半妖の霖



「ご主人  いつの間にお帰りでッ!？」

「……ちようど今だよ。それより小傘  」

大型の亀が頭を伸ばすように、本棚から上半身を晒す少女  
多々良小傘たたらこがさに、霖之助は飽きれながら言った。

「君は、またやったのかい？」

「あ、あわわわわ。こ、これは違うんです  ッ!！」

じたばたと、小傘は両腕を大袈裟に振るい、狼狽うろたえる。

本棚に潰されながら両腕をばたつかせる事で、小傘の水色の髪が  
慌ただしくも揺れる様は、まるで潰れた小動物がもがいているよう  
にしか見えない。

それは不思議と、保護欲が強く刺激される姿だった。

「こらこら、僕は別に怒っちゃいないよ。だから、本棚に潰された  
状態で、そんなに暴れては駄目だ」

言いながら小傘へと歩み寄ると、霖之助は体を屈ませた。

「……お、怒ってないんですか？」

「嗚呼、怒っちゃいない」

「ほ、本当ですか？」

「本当だとも」

何をそんなに怯えるのか、対照的な二つの瞳を潤ませる小傘に、霖之助は笑みを浮かべ応えた。  
そして、恐縮してうなだれる小傘の頭を、優しく撫でてやった。

「さて、先ずはこの本棚を退けるから、少し待っていてくれ」

小傘の腰から下を覆うように倒れる本棚を、霖之助はゆっくりと起こした。

ぎしり　と、床が軋む。

ずきり　と、脇腹が痛む。

じくじく　と、火傷が服に擦れる。

嗚呼、`体中が痛い`。

……だが、これも悪くはない。

捨てた過去達と同様、この痛みを代償に何かに触れる事が許されたのなら、この痛みも中々捨てた物ではない。

「ううう……た、助かりました……」

「どう致しまして。しかし、君なら自力で抜け出せたる？」

元の位置に戻された本棚。

倒れた拍子に、列べられていた本は落ちている。

それは　何も乗らぬ空の本棚。

成人男性ぐらいの背丈はあるが、木製の棚に大した重みなどなかった。

その大きさからして、持ち上げるのには少々手子摺るだろう。しかし、重心を残したまま、梃子の要領で起こすのは容易い。

「あう……そ、そうですけど。力付くに退けて何かにぶついたりしたら、棚が可哀相ですう……」

本棚が退かされ起き上がった小傘は、霖之助の問いに縮こまって応えた。

「……成る程。その思いやりは、道具を扱う者として大切だね……でも、それだけじゃ駄目だ。次からは、君は自分を一番大事にしなさい」

「でも、ご主人の本棚が」

言い掛けた小傘の口を、霖之助の手が塞いだ。

「確かに、棚も大事だ。勿論、そこに列べれた本達も大事だね……でも、僕からしたら君も　いや、棚や本達には悪いけど、君の方が大事だよ」

言つて、霖之助は小傘の頭を撫でた。

壊れ物を扱うかのように　昔、霧雨の一人娘にしてやったように　優しく、優しく撫でた。

雨の日、傘は持ち主を得た。

雨の日、男は一本の傘を得た。

長い時間、待ち望んでいた　掛け替えのない主人を得た。

日々、日常に浮かぶ一瞬の時にさえ、大切だ、大切だと傘は繰り返す。

では、男にとってこの傘は何になるだろう？

只の道具、拾い物の一本の傘　その程度の物だろうか。

人と同じように動き、人と同じように話す傘。  
感情と言う喜怒哀楽を持った傘は、男にとって只の道具なのだろうか。

その答えが分かるのは、傘の持ち主となった男だけだ。

素直さとは縁のない、半人半妖の男だけだ。

しかし、男は傘に一つだけ告げる。

傘が落ち込んだり泣き出す度に、無駄に前フリの長い意地悪な台詞を、一字一句一と変えずに一つ言い聞かせている。

駄目かな？ 参ったな。

きつと、君だけだよ？ きつと、他にはないんだ。

きつと、僕の手には馴染む傘は、幻想郷に君だけだ。

其ノ参(後書き)

次から地の文で良いや・・・

## 烟（けむ）る

教養とは実に奥深い。

“教養” 簡潔に言えば学問や技能によって得た理解力と心の豊かさ、同時にそれらを含んだ社会的な広い知識と呼ばれている物だ。

そして、それら教養を幅広く含んだ物が教育とされ、それに当てはまるあらゆる分野に対し“須く励むべきである”、と昔から良く良く言われている。

しかし、その全てを自主性に任せる訳には行かずして、逆を言えばそれらの技能にせよ知識せよ、大人達がただ教え与えれば良いと言いつてではない。

そもそも、いつの世も子供とは大人の知らぬ間に、何処からか多くの物事を覚えてくる物だ。

何処で誰に言われたのか、まだ知らなくても良い事をも学んでくる。

時に大人達が教える事に戸惑いを覚え、しどろもどろ言葉を詰まらせてしまうような知識ですら、子供とは何処からか学んで来てしまう。

そう 例えば男女の違いなど。

男と女と言った性別の違いは、精神的にも肉体的にも様々であり、しかし幼い少年少女達からすれば酷くも曖昧な物だ。

女性用の廁 失礼の無いように言い直すと、女性用の手洗いがあれば男性用の手洗いもある。

着脱の時に使う更衣室なども同様に別れ、そもそもの衣類も男女別々に造られる。



異性感やら男女間やら、何時の時分からかこれは当たり前前とされた。

しかし、それは何も男女に限った話ではない。

性別だけに限らず、世に存在する様々な物事には、多かれ少なかれの差違が生じる。

例えば 国々であったり、その時代や世代であったり、その場その場に生まれた風習や風土であったり、また種族であったり。

霧雨魔理沙は足を止めた。

とてとて、と何処か力なく覚束ないその足取りを、唐突に止めた。今のさっきまで泣いていたのだろうか、両の瞼は悲しげに下がっている。

何が悲しいのか、何を嘆いているのか、その姿は少女のさな背丈をより小さく思わせた。

“ 魔理沙は、君は歴とした人の子だ。 ”

それは、少女 霧雨魔理沙の脳裏を過る あの日、別際に告げられた森近霖之助の言葉。

その別れの言葉を思い出せば、そう言うては自虐的に笑う霖之助の顔を思い出して、魔理沙は訳も分からぬ不快感をも覚えた。

それでも、霖之助は言うのだ。

思い出の中で告げるのだ。

“でも、僕は半分だけ たったの半分だけしか人の血を引  
ちやいない。

言わば人として、人間として何処までも半端な存在だ。

それなのに、それなのに僕は、何故だか妖怪の血を半分も引いて  
いるのだから、妖怪としても酷く半端な そう、言わば出来損  
ないだ。”

だから だから何だと言うのだろうか？

自分が人だから、霖之助が妖怪だから一緒に居ちゃいけないな  
んで、親にも先生にも教わってなどいない。

そもそも霖之助は、半分だけ妖怪だと言っただけでもう半分は人間  
なのではないのか、と魔理沙は強く思った。

それなのに、何で一緒に居ては駄目なのだろうか。

それも一方的に、彼から拒絶をされなければいけないのだろうか。

何で、何で駄目なのだろう

何で自分は、好きな人と、森近霖之助と一緒に居てはいけないの  
だろうか。

幼い少女に、恋だ愛だは分からない。

ただ単純に、ただ純粹に好きなのだ。

一人の存在として、一つの個として自分を満たしてくれる“森近  
霖之助”と言う存在が好きだった。

寂しいのには慣れている。

何故なら物心の付いた頃には、いつだって寂しさがあつたからだ。

だけど、いつだって後ろを振り替えれば、そこに霖之助が居てくれた。

遊ぶ時も、食事の時も、寝る時も、霖之助と一緒に居てくれた。決して年がら年中と言う訳ではないのだけれど、やはりそこには霖之助が居て、優しく見守ってくれた。

父や母が店の事で忙しくて、自分と一緒に居る時間が取れなくても、それを埋めるように霖之助と一緒に居てくれた。

それが喜ばしくて、まるで春の陽射しのようで、霧雨魔理沙にはとても温かかった。

例えそれが直接的でなかるうとも、また如何に間接的であろうとも、知覚の出来る優しさは嬉しいのだ。

振り替えるだけで、名前を口にするだけで、幼心に確かな温もりを与えるのだ。

だが、だから寂しさはなかった、と言えばそれは嘘になるのだろう。

しかし、それを埋めるだけの“確かな物”がそこにはあったのだから、時に泣きもする、だがその倍の数を笑えたのだろう。

けれど、悲しいのには慣れていないのだ。

そこに誰も居ない寂しさだけは、とてもではないが堪えられないのだ。

元来、人見知りの気が強かっただけに、親とは違う唯一の人物は一人だけだった。

両親と同様、何処にも代わりは居ない、代わりなど居ない居ない、居ない、居やしない。

かつては当たり前のように在って、当然のようにそこに居た存在。

だが、ふと気付けば、何気なく後ろを振り替えて見れば

そこにはもう誰も居ない。

そう　それは当たり前での物ではなかった。

“誰か”とは貴い存在である。

当たり前であるが故に、誰かとは何者にも代用が効き、何者にもなり得ない。

それはパズルのピースと同様、見てくれが類似しているだけの別物だ。

反して“特別”とも呼べる“個”であるのだ。

だから我々は、それに気付かず、それを知り得ず、求めずもそこに生まれ　故に知らせず、故に与えず、ただ陽炎のようにその姿を眩ます。

人里。

道行く様々な人ざわざわと賑わい、雑踏となり活気を見せる。

霖之助にとっっているは久しぶりの場所　正確には、日の当たる時間滞にこの場に居る事がずいぶんと久しぶりだ、と言う方が正しいのだろう。

自分が奉公人だった頃を懐かしく思ったのだろうか霖之助は、ふう、と渴いた息を一つ吐き出してから眩しそうに目を細めた。

太陽の照り着けは決して強くないのに、切なく感じたのか。

“いや　それは違う。”

別に憂いを抱いた訳ではないのだ。

他人や時の流れを寂しいと思う程の付き合いなど、今の自分には限られている。

そもそも自分は人間とは距離を置いて来たのだから、向こうからしても自分など景色のような物だ、と霖之助はそう考えている。

だから、自分はただ人の暮らしまが珍しく思っただけなのだ、と誰に言うでもなく自身に言い聞かせるかのように胸の内にて囁いた。

「 どうしたんですか、ご主人？」

「 何でもないさ。ただ、人混みは久しぶりだから少し酔っただけだよ」

そう言ってすぐ横を歩く小柄な少女 多々良小傘たたらこがさに一瞬だけ目を向け、霖之助は首を左右に振る。

その返答の内容は霖之助が適当に告げた出任せだった。

だが小傘は、それなら良いのですが、と応としては唸るようにして頷き、道行く人の波を見渡した。

「 むむ。これは確かに、すっごい賑わいようですねえご主人。もしやここは、いつもこのぐらい賑わっているのですか？」

「 どうだろうか、と霖之助は言う。」

「 そこまで頻繁に足を向ける訳ではないから、普段を語る程ではないけれど、確かにこれは凄い賑わいようだ。これから祭りでもあるのかと、錯覚をしまいそうだ」

正直なところ少し喧しい、と考えながらも霖之助は相槌を返した。

「もしかしたら、本当にお祭りかも知れないですよ」

「いやいや、まさか。桜は過ぎたばかりだし、夏には少しばかり遠い時分だ。良くある話して、良家の縁談とか世継ぎが決まったんじゃないかな。例えば身分ある家の娘が何処かの家に嫁いだとか、または何処ぞの潔癖性な妹に良い人が現れたとか」

耳に届く“目出度い”<sup>めでた</sup>の声に、霖之助は戯けるように眉を持ち上げ言っのだった。

烟(けむ)る(後書き)

電気を大切にね。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5938m/>

---

空説

2011年9月10日11時53分発行